

St. Luke's International University Repository

看護学導入プログラムにおけるシャドーイングアドバンスの試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Fundamentals of Nursing, Nursing Practice, Nursing Education, Teaching nursing skills, Clinical Education report 作成者: 佐居, 由美, 大久保, 暢子, 石本, 亜希子, 佐竹, 澄子, 安ヶ平, 伸枝, 菱沼, 典子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/1319

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報 告

看護学導入プログラムにおけるシャドーイングアドバンスの試み

佐居 由美¹⁾ 大久保暢子¹⁾ 石本亜希子¹⁾
佐竹 澄子¹⁾ 安ヶ平伸枝¹⁾ 菱沼 典子¹⁾

Trial of 'Shadowing-Advanced' to Aid Transition to First Clinical Practice

Yumi SAKYO, RN, MN¹⁾ Nobuko OKUBO, RN, PhD¹⁾ Akiko ISHIMOTO, RN, PHN¹⁾
Sumiko SATAKE, RN, MN¹⁾ Nobue YASUGAHIRA, RN, MN¹⁾ Michiko HISHINUMA, RN, MS¹⁾

[Abstract]

In the 2007 school year, St. Luke's College of Nursing introduced and then evaluated a shadowing program for 2nd year students. The aim of 'shadowing-advanced' was to smooth students' transition into their first clinical practice course, Nursing Skills IV (Clinical Practice). 'Shadowing-advanced' was run as part of a total practical learning program that includes Nursing Skills I (Communication Skills & Methodical Thinking), Nursing Skills II (Physical Examination Skills) and Nursing Skills III (Nursing Skills). 'Shadowing-advanced' occurred in the morning over two consecutive days and involved students shadowing nurses, observing them as they went about their work. Depending on the circumstances students could assist the nurses in providing nursing care to patients. Following their experience, students completed a questionnaire and participated in a focus group interview. Results indicated that by experiencing a wide variety of nursing situations, students were able to bridge the gap between theory and practical subjects, experience a sense of self-development and also gain increased motivation. Thus, 'shadowing-advanced' was a useful part of their practical learning.

[Key words] fundamentals of nursing, nursing practice, nursing education, teaching nursing skills, clinical education, report

[要 旨]

聖路加看護大学では、2007年度に、学部2年生を対象にシャドーイングアドバンス導入を試みた。シャドーイングアドバンスは、看護学生が初めての実習（基礎実習：科目名「看護援助論Ⅳ」）を円滑に遂行することをめざし、「看護援助論Ⅰ（コミュニケーション技法・系統的思考）」「看護援助論Ⅱ（フィジカルイグザミネーション技法）」「看護援助論Ⅲ（看護技術）」の統合演習としての位置づけで行った。この演習は、午前中のみ2日間連続で実施され、学生が看護師とともに行動し、看護師の活動の実際を見学し、状況に応じて看護師と共に患者に看護援助を行う形態である。

演習後、アンケート調査とフォーカスグループインタビューを行ったところ、シャドーイングアドバンスにおいて、学生は「様々な看護場面を体験」することで「講義と実践のつながりを実感」し、さらに、「自らの成長を自覚」し、「モチベーションが向上」しており、シャドーイングアドバンスは、「実習に役立つ演習」であることがわかった。

[キーワード] 基礎看護学、基礎実習、看護教育、早期体験実習、教育実践報告

I. はじめに

現在の少子高齢社会においては、国民の健康生活を支える看護職の重要性が認識され、看護基礎教育の大学教育への移行が急速に進んでいる。しかし、以前より大学教育では卒業時の看護技術の習得が未熟であるとの指摘があり、看護基礎教育の到達目標については長く検討されている。一方社会全体では、少子化の中で大学全入時代となり、看護系大学の入学定員の増加とあいまって、看護系大学への進学はより容易になっている。一般に少子化の中で、大学入学時の学生は生活体験が少なく、成熟度が低く、コミュニケーション能力が低く、人間関係が希薄であること、また大学入学後に目標を見失うものがあること等が指摘されており、看護系大学においても同様の傾向が見られている。看護系大学への入学希望者は、その入学意図が明確で、目的意識が高いといわれているが¹⁾、学生の学習状況の変化は否めない。

そのような状況をふまえ、聖路加看護大学基礎看護学では、初めて看護学を学ぶ初学者の学習準備状況を的確にとらえ、それに適した看護学の導入方法を検討するための研究（研究代表者：菱沼典子：「少子化社会の学生の特性に合わせた看護学導入プログラムの開発」、平成19～22年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究B）に取り組んでいる。現行の看護学導入時の学習プログラムは、今後調査研究を経て、学ぶ主体である学生を中心とした、少子社会・全入時代の学生の学習準備状況に合ったプログラムへと再構築される予定である。

本稿では、この研究に先駆けて試みたシャドーイングアドバンス演習について、本学での看護学導入プログラムにおける位置づけとともに報告する。なお、本稿は、「少子化社会の学生の特性に合わせた看護学導入プログラムの開発」研究の前段階として行った病棟見学演習に関する教育実践報告である。

II. 本学の看護学導入プログラムにおけるシャドーイングアドバンスの位置づけ

聖路加看護大学におけるカリキュラムは、その内容から大きく「教養科目」「基礎科目」「専門科目」の3つに分かれている。「教養科目」は、看護学を学ぶ土台となる、様々な専門分野からの物の見方、考え方、人間の見方を広く学ぶ科目であり、「基礎科目」では、健康と環境、人間についての見方を学び、「専門科目」では、看護の働きかけの実際とその理論根拠を学ぶ。また、専門科目は、6つの科目群（「看護の基本」「人間と環境の相互作用（回復保護、修正、保持強化）」「臨床実習」「看護学統合」）からなり、看護学における援助法を、初学者にわかりやすいように組み立てて展開されている。

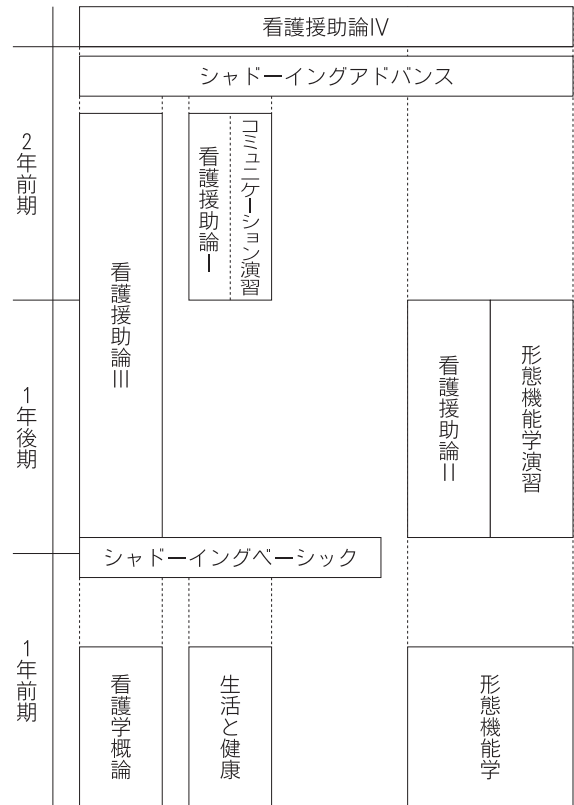


図1 看護学導入時の科目間（基礎看護学担当）の関連

「看護の基本」では、看護が関わる生活と健康を身近なところから学び始め、看護という職業の歴史と看護学の発展状況を学びながら、看護について洞察する視点を養う。また現在看護が有する援助方法論として、対人関係論・看護の展開法（科目名「看護援助論Ⅰ」）、健康状態のアセスメント法（科目名「看護援助論Ⅱ」）、具体的な生活行動の援助法（科目名「看護援助論Ⅲ」）を学ぶ。さらに看護が社会にどのような形で提供されているのか、そのシステムについて学習する²⁾（科目名「看護提供システムⅠ」：2年次後期に履修）。

われわれ聖路加看護大学基礎看護学領域では、この「看護の基本」に属する7科目のうちの6科目および基礎科目の「形態機能学」「形態機能学演習」を担当している。2006年度より同一領域の教員で8科目のすべてを担当している利点を生かし、より円滑な学生の学びを促すため、この8科目の内容を見直し、科目内容の順序性により配慮し、科目複合演習を導入し、科目内容を有機的に融合させて教授活動を展開している。この融合は、学生にとっての初めての实習である「看護援助論Ⅳ」において、学生が机上の学びと臨床現象を統合させ、初めての看護実践（実習）に円滑に導入でき効果的な学習を行うことができることをめざすものである。本学における看護学導入に該当する期間は、この学生にとっての初めての实習まで、すなわち、入学時より2年前期までの1.5年間としている。

表1 シャドーイング演習概要

	シャドーイングベーシック	シャドーイングアドバンス
導入時期	2006年度	2007年度
目的	1) 看護学生の立場で初めて看護師の活動の実際を見学する。 2) 将来、自分の目指す看護師像を考える。	1) 9月に行われる初めての病棟実習(看護援助論Ⅳ)に向け、看護師の活動の実際や看護実践の場の雰囲気(構造、患者、医療スタッフなど含む)を知る。 2) 看護師と共に行動することで、9月の実習において、自分がどのように看護を展開していくかをイメージする。
実施時期: 演習日程	1年次7月:土曜日1日, 8:00-11:30	2年次6月:2日間 (連続した金曜・土曜, 8:00-11:30)
演習場所	聖路加国際病院 16病棟	聖路加国際病院 内科系・外科系病棟 10病棟
演習方法	1人の看護師の後ろに1人の学生がつき、その活動の実際を観察する。	1人の看護師と共に行動し、看護師の活動の実際を見学する。状況に応じて看護師と共に看護援助を行う。
服装	私服にエプロン着用	看護実習着用
学習項目	1) 看護師の看護/仕事の実際 ・看護/仕事の内容・流れなどを実際に見る。 何人の患者を看ているか。その日の仕事の計画をどのようにたてているか。看護師間、医師などの他職種との連絡方法はどのようにとっているのか。どのような患者を受け持っているか。どのような人と関わり、協働しているか。 2) 看護活動の場である病棟・病室の特徴・病棟・病室の雰囲気・印象など。:生活の場としての病室がどのように整えられ、工夫されていたか。	1) 看護師の看護の実際 臨床の場でどのように看護実践が行われているのかを知る。 ・バイタルサインズの測定、呼吸音の聴診、患者とのコミュニケーション等について ・全身清拭、食事介助、排泄の介助等の日常生活援助技術について ・与薬、採血などの診療の補助に関する援助技術について 2) 看護活動の場である病棟・病室の特徴 看護活動を行う上での病棟、病室の特徴などを知る ・病棟、病室の構造 ・日常生活援助(食事、排泄、清潔など)を行う上での環境・物品の配置など

本学における看護学導入時の「専門分野」科目間の関連性について、図1に示した。1年次前期に、学生は「生活と健康(2単位)」「看護学概論(2単位)」「形態機能学(4単位)」を学ぶ。「生活と健康」では、看護の主要な要素である「生活」「健康」について学び、「看護学概論」では、看護学のイントロダクションとして、「看護学」とは何かへの問いの視点を多角的に学ぶ。「形態機能学」では、人体の解剖生理を、人間の日常生活行動の視点で教授し、看護を実践するために必要な基礎的な知識獲得を目指している。「生活と健康」で、人間の健康と生活を、「看護学概論」で看護のイントロダクションを学んだ学生は、学期末の7月に、半日の病棟見学演習「シャドーイングベーシック」を行う(表1)。この演習では、「看護師の活動の実際を見学し」「将来、自分の目指す看護師像を考え」「看護師の看護や仕事」や「看護活動の場であり、患者の生活の場である病室」について、その実際を学ぶ。夏季休暇を経て、1年生後期には、「形態機能学演習(2単位)」「看護援助論Ⅱ(3単位)」「看護援助論Ⅲ(3単位)」が開始される。「形態機能学演習」は、既習の「形態機能学」の知識を活かした演習(生理学的指標の測定、臓器組織標本の観察)を行い、「看護援助論Ⅱ」ではフィジカルイグザミネーション技法を学び、「看護援助論Ⅲ」では、日常生活行動と

診療介助に必要な看護技術を学習する。なお、2007年度より、「人間のからだの構造と機能」に関する演習科目である「形態機能学演習」と、フィジカルイグザミネーション技法を主に学ぶ「看護援助論Ⅱ」は、その内容を融合させ、重複(類似)していた演習内容の整理を図り、より系統だった学びができる構成としている。冬季休暇後の2年前期には、コミュニケーション技法・系統的思考などの内容を含む「看護援助論Ⅰ(3単位)」の履修が開始され、「看護援助論Ⅲ」は継続して行われる。「看護援助論Ⅰ」では、「コミュニケーション演習」が実施される。この演習は、学生が任意の看護の現場(同一の場所で、1.5時間以上3回以上)にて、その場の利用者や職員とコミュニケーションし、その場面の会話をプロセスレコードで記録する演習である。その後、学生は2年次6月に2回目の病棟演習「シャドーイングアドバンス」を行い、9月に初めての実習である「看護援助論Ⅳ(1単位)」を実施する。「看護援助論Ⅳ」は、看護における援助方法「看護援助論Ⅰ」「看護援助論Ⅱ」「看護援助論Ⅲ」を、病棟にて実際に患者を受け持つことにより実施する実習科目である。なお、本学では、実習科目群を3つのレベルに分けて段階的に実習を行っており、各レベルは、共通の項目による実習目標を有し、初めての実習である「看護援助論Ⅳ」は、レベルⅠの実習に該当する。なお、

表2 シャドーイングアドバンスでの経験 フィジカルアセスメント

(n=47)

経験*率	経験内容(人数)
95~90%	体温測定(45)・血圧測定(44)・脈拍測定(42)
70%	呼吸測定(34)
30~40%	・腹部：聴診(19)・腹部：触診(18)・胸部：聴診(18)・バイタルサインズ測定(18) ・腹部：視診(15)・胸部：視診(15)
15~20%	・意識障害対光反射の確認(7)・筋関節の視診触診(7)・腹部：打診(7)・心臓循環系：聴診(7)・鼻口腔咽喉頭：視診(7)
10%以下	・胸部：触診(6)・心臓循環系：視診(4)・心臓循環系：触診(3)・反射の確認(2)・脳神経系の検査(2)・筋力測定(MMT)(2)・ROM(関節可動域)の測定(1)・胸部：打診(1)

*学生が「見学」または「ナースと一緒にいった」経験

2年前期には、上述以外の専門科目として「生涯発達看護論Ⅰ」を履修する。

以上が、本学における看護学導入プログラムである。2006年度より、科目内容を見直し、学生の学習がより効果的に行えるよう様々な取り組みを行っているが、その一環である「シャドーイングアドバンス」演習は、学生の初めての実習への導入を円滑にするために、2007年度より導入を試みた。本稿では、その概要を教育実践活動として報告する。

Ⅲ. シャドーイングアドバンスの概要

1. シャドーイングアドバンスの方法

シャドーイングアドバンスは、2007年度より、学生が「看護援助論Ⅳ」を円滑に遂行することをめざし、「看護援助論Ⅰ」「看護援助論Ⅱ」「看護援助論Ⅲ」の統合演習としての位置づけで行った。演習は、1人の看護師に1人の学生が同行し、看護師の活動の実際を見学し、状況に応じて看護師と共に看護援助を行う形態である。午前中半日、2日間連続で行った(表1)。

演習実施にあたっては、「看護援助論Ⅳ」の実習施設である聖路加国際病院の教育研修センターの看護教育担当者に事前に演習内容を相談し、演習名を「プレ実習演習：シャドーイングアドバンス」とした。1年次に実施する「シャドーイング」と区別するため、看護大学入学間もない1年次に行う演習を「シャドーイングベーシック」と、看護学を学んで1年半経過した2年次に行う演習を「シャドーイングアドバンス」と称することとした。また、1年次の演習は、私服にエプロンを装着して行ったが、2年次の実習前の演習は実習服にて行った。実習場所は、聖路加国際病院の内科系外科系病棟10病棟の協力を得た。68名の学生を3クールに分け、1病棟につき2~3名の学生が演習を行った。

2. シャドーイングアドバンスにおける学生の学び

1) 実施直後のアンケート結果

シャドーイングアドバンスでの学生の経験を把握するため、実施した学生を対象にアンケートを実施した。68

名の学生にアンケート用紙を配布し、自由意思による記入を依頼した。47名(回収率69%)から回答を得た。

アンケートは、シャドーイングアドバンスの感想、フィジカルアセスメント項目(30項目)および看護技術項目(63項目)についての経験の有無、自由記述、で構成されていた。

(1) シャドーイングアドバンスの感想

シャドーイングアドバンスについて、「よかった」「まあまあよかった」「あまりよくなかった」「よくなかった」の4段階で回答を求めたところ、「よかった」41名(87.2%)、「まあまあよかった」6名(12.8%)、「あまりよくなかった」「よくなかった」ともに、0名であった。

(2) シャドーイングアドバンスでの経験内容

フィジカルアセスメント項目・看護技術項目については、「見学」「ナースと一緒にいった」の2つの回答欄にて経験の有無について記入を求めた。

フィジカルアセスメント項目(表2)

「看護援助論Ⅱ」における学習項目であるフィジカルアセスメントに関する経験内容では、90%以上の学生が、体温・血圧・脈拍測定の場面を経験(見学・ナースと一緒に実施)し、腹部の聴診・触診、胸部の聴診、バイタルサインズの測定(全般)は、約40%の学生が経験していた。

看護技術項目(図2-1)(図2-2)(図2-3)

「看護援助論Ⅲ」での学習内容に該当する看護技術に関連する項目では、学生が実際に「ナースと一緒に実施」したものは、多い順に、「手洗い」「食事のセッティング」「全身清拭」「寝衣交換」「安楽な体位の保持」「体位変換」「おむつのあて方、はずし方」「ベッドメイキング」「陰部洗浄」「移送(車椅子)」「シャワー浴」「ナース(NS)コールの確認」であった。「看護援助論Ⅳ」の目標である「日常生活援助」に関連する経験が、上位を占めていた。学生が「見学」したのは、「点滴静脈内注射の管理：38名」「酸素飽和度測定：30名」「経口薬の投与：31名」「症状、病態の観察：26名」「体動コールの確認：26名」「膀胱留置カテーテルの管理：25名」などで

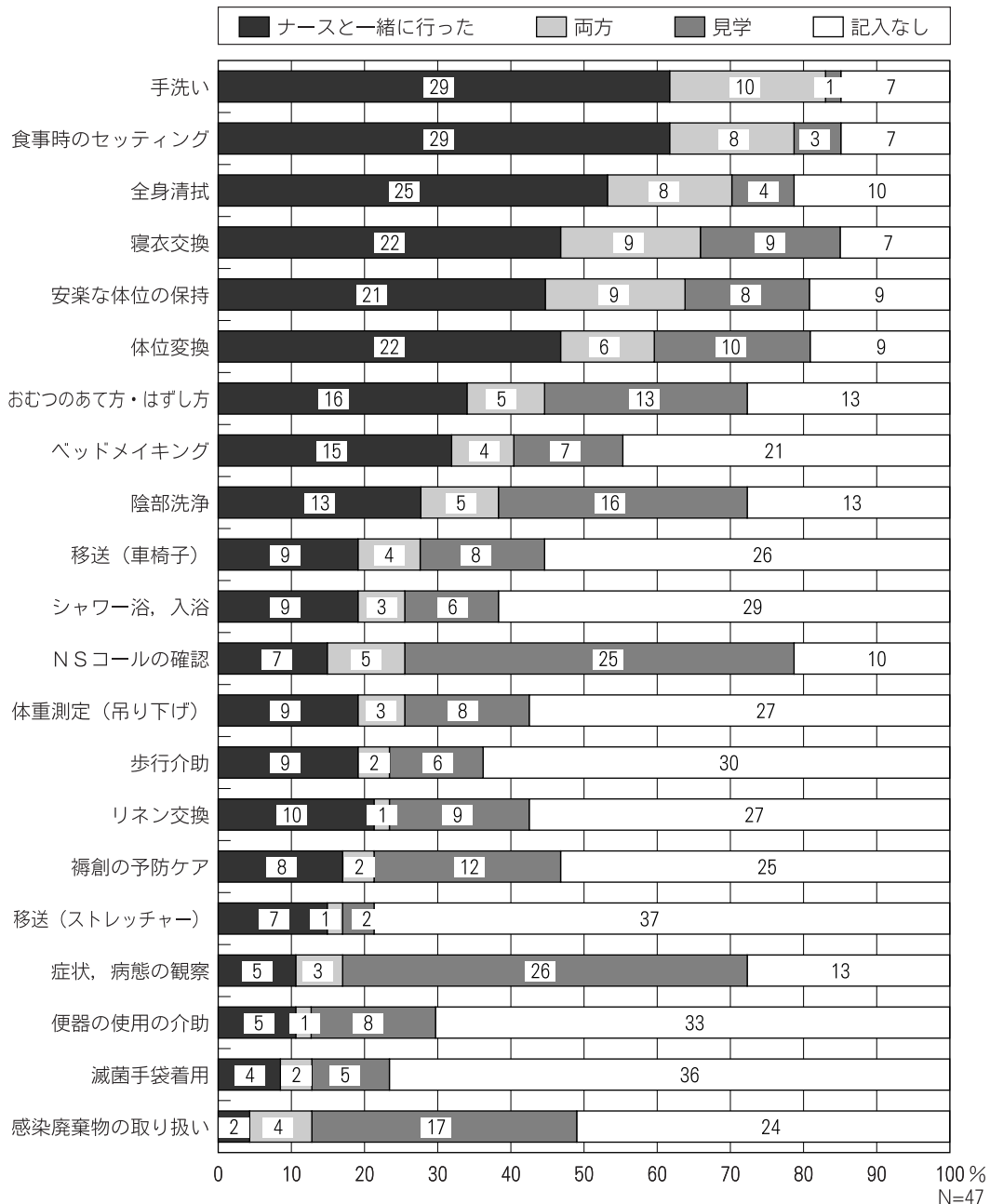


図2-1 シャドーイングアドバンスでの経験 ~看護技術~

あった。

その他の経験項目 (自由記述)

質問項目以外の経験内容としては、「硬膜外チューブの見学」「胸水穿刺」「抑制」「人工呼吸器をつけている患者の体位変換」「リハビリ見学」「退院オリエンテーション」「週末期患者のケア」「家族のケア」「緊急事態の対応」「コミュニケーション」などが挙げられていた。

(3) シャドーイングアドバンスの感想 (自由記述)

シャドーイングアドバンスについて自由な記述を求めたところ、42人が回答した。それらの記述内容を分類したところ、学生の感想は、「看護師役割の把握」「講義と実践のつながりの実感」「モチベーションの向

上」「ロールモデルの獲得」「自らの成長の自覚」「課題の明確化」「様々な看護場面の体験」「実習に役立つ演習」「看護師についての感想」「2日連続演習の意義」「演習方法への希望」「その他」に分類された。「様々な看護場面の体験」のなかでは、「看護援助論Ⅰ」の学習内容である「コミュニケーション」についての記述が複数みられた (表3)。

2) 「看護援助論Ⅳ」後のフォーカスグループインタビュー
シャドーイングアドバンスが、初めての实習である「看護援助論Ⅳ」実施に役立ったかどうかを把握するため、フォーカスグループインタビューを行った。対象はインタビューの主旨を説明し同意が得られた「看護援助論Ⅳ」履修済みの2年生10名であり、3つのグループ (1

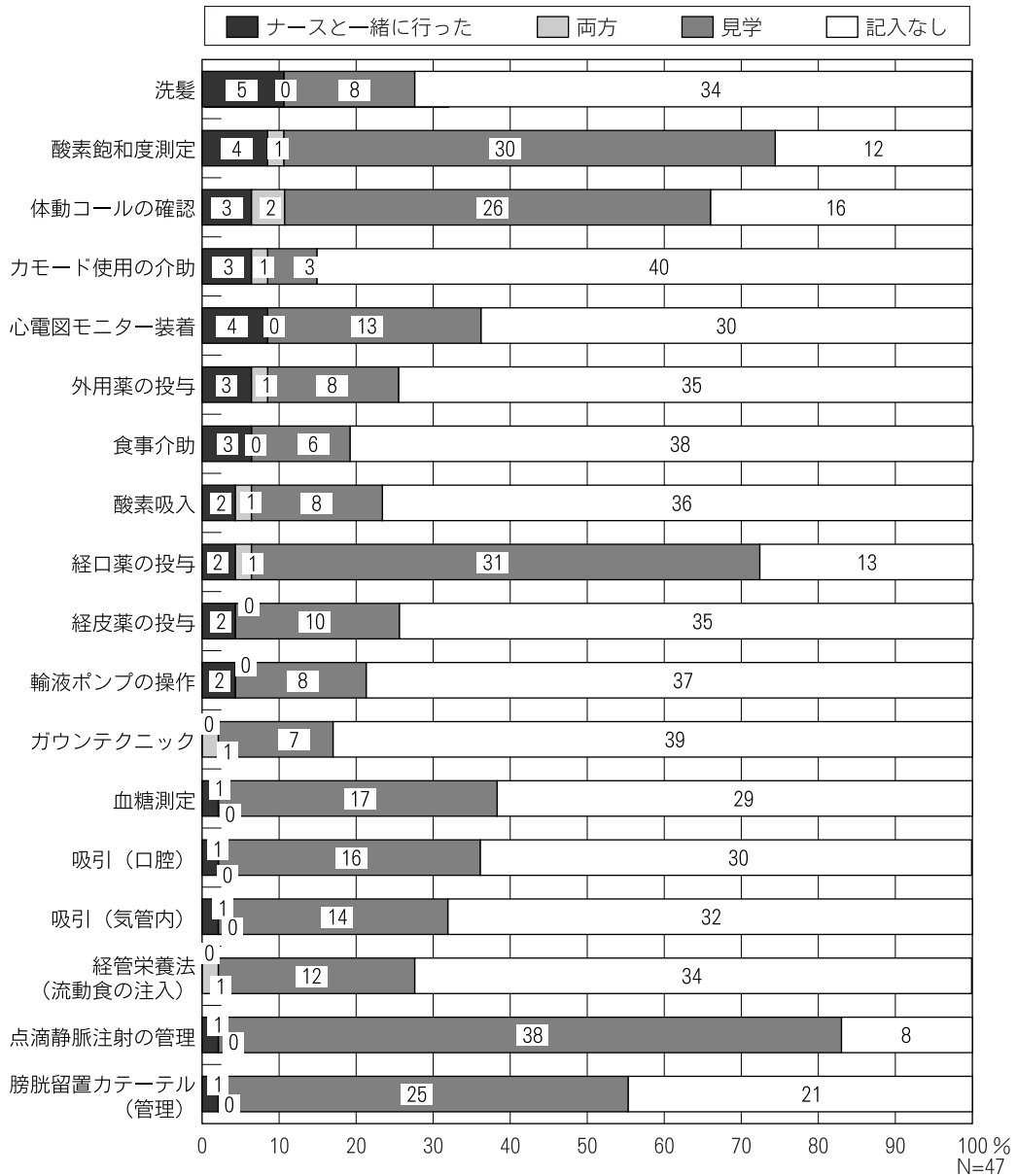


図2-2 シャドーイングアドバンスでの経験 ~看護技術~

グループ3~4人)に分けてインタビューを行った。インタビューに先んじて、インタビュー協力者にはインタビュー内容は録音され匿名性が保たれたうえで公表される旨も説明し了解を得た。インタビュー内容は、「シャドーイングアドバンスの看護援助論Ⅳについての有用性(具体的内容)」「他に看護援助論Ⅳ実施に役立ったこと(看護援助論Ⅰコミュニケーション演習を含む)」「実習実施を容易にするために希望すること」の主に3項目であった。インタビュー時間は、平均44(32~58)分で、インタビュー内容は逐語録とし、その後、録音テープは再現不能な状態にて廃棄した。

インタビューでは、3つのグループとも学生はシャドーイングアドバンスは実習実施に役立ったと語った。具体的に役立った点は、「日常生活の援助が具体的にわかった」「学校で習ったことと実際に現場で行われていると

のつながりを実習前に確認できた」「物品の位置や病棟の構造がわかった」などであった(表4)。

シャドーイングアドバンスの他に、初めての实習実施に役立ったこととしては、「聖路加国際病院での病棟ボランティア」「在宅介護ボランティア」「農村医療研究会での活動」などが挙げられた。「看護援助論Ⅰ」でのコミュニケーション演習については、「自分のコミュニケーションの癖がわかってよかった。」「客観的に自分の会話を振り返ることができてよかった」とのことであった。

実習実施を容易にするために希望することとしては、「看護過程の演習を、いろんな症例で実施したい」「講義で行ったことを、すぐ実習で学べるとよい。1週間のうち3日講義で、2日実習など」「病棟のナースから直接オリエンテーションを受けたい」「先輩など実習経験者から、シャドーイングアドバンスで何を見てくればいいのか

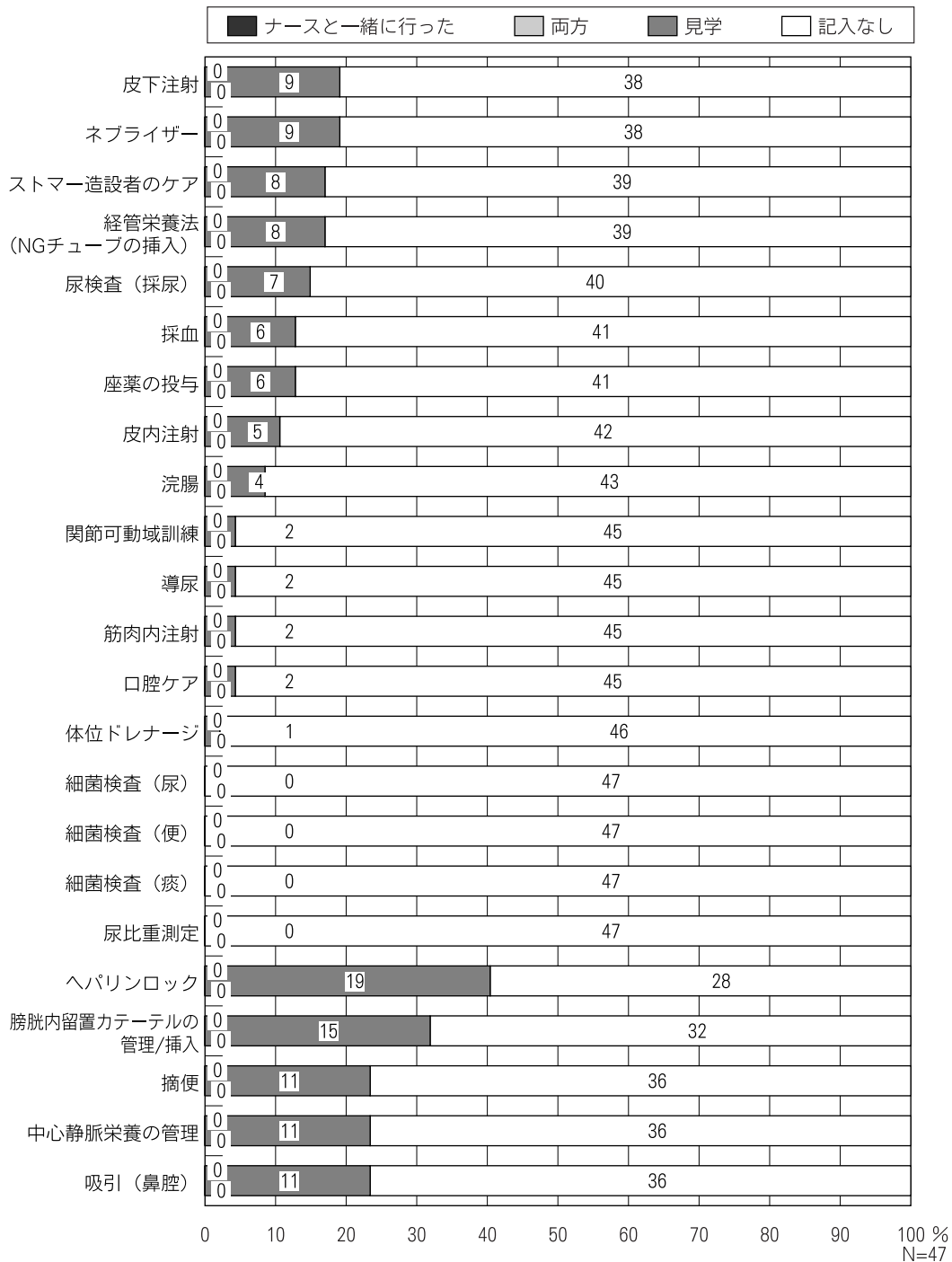


図2 - 3 シャドーイングアドバンスでの経験 ~看護技術~

話してくれるといい」「病棟ボランティアができる病棟が増えるといい。気軽に事前に病棟に行けるのがいい」「シャドーイングアドバンスと同じ病棟で実習したい」などが、発言された。他に、「シャドーイングアドバンスでの経験は、どのようなナースにつくかによる」「病棟によって経験できる内容が違う」という発言もあった。

V. 考 察

シャドーイングアドバンス演習にて学生は、臨床現場

で患者と接し、コミュニケーションをとり、バイタルサインの測定、日常生活援助技術など様々な看護を、ナースとともに経験していた。これらの経験は、「看護援助論Ⅳ」の目的である「看護援助論Ⅰ (コミュニケーション技法・系統的思考)・Ⅱ (フィジカルアセスメント)・Ⅲ (日常生活援助技術, 診療の援助技術) で学習した知識と技術を安全・安楽に行う」につながるものであり、シャドーイングアドバンスは、自らが看護を実践する実習の実施を円滑に行うための助けになる「実習に役立つ演習」であったといえよう。また、フィジカルアセスメ

表3 シャドーイングアドバンスについての学生の感想（自由記述）

内容（記述件数）	具体的内容（抜粋）
看護師役割の把握 （7件）	・コミュニケーション方法や病棟の雰囲気を観察でき、ナースの日々の仕事の流れも把握できた。 ・2日間を通して、実際に病棟で看護師の仕事内容を見ることができて、リアルなイメージを持つことができました。
講義と実践とのつながりの実感 （9件）	・授業で勉強したことが臨床でも、本当に大事なのだと改めて実感されました。 ・実際に自分達が学んだ事柄や技術が臨床でいかに使われているのかすごくよくわかった。
モチベーションの向上 （10件）	・シャドーイングアドバンスを通して、看護師になるモチベーションが上がった。 ・最近では忙しくてモチベーションが下がっていたけど、ナースの姿を見て刺激になった。
ロールモデルの獲得 （2件）	・ナースの半日の動きを一緒にすることで、将来像のようなものなのも何となくイメージできた。 ・ナースは技術だけでなく、人間的にも身に付けなければならないことがたくさんあるのだと実感したし、自分の目指すナース像が少しイメージできたと思います。
自らの成長の自覚 （21件）	・ナースの話していることを理解できて、自分の成長も分かった ・前回のシャドーイングよりも、ナースの行っていることやその意味がわかった。 ・1年経ってこんなにわかるようになったんだ!!と感激しました。 ・昨年のシャドーイングとは違い、実際患者と関わることができたため、知識の確認ができたため演習が終わった（一区切りついた）という時期が良かった。
課題の明確化 （8件）	・自分の欠点など、改善しなきゃいけないことがわかりました。 ・自分の看護技術はもちろんのこと、患者への接し方やコミュニケーションの仕方など技術以外の部分においてもまだまだ課題が多いということに気づかされた。
様々な看護場面の体験 （12件）	・2日間で2人の看護師さんに色々教えてもらい、10名程の患者さんと接することができて良かった。 ・ナースと患者との上手なコミュニケーションを見ることができ、実際のナースの動きや家族の方との話し方、技術的なことも、机上とモデルさんでしかわからなかったのが実際の患者へのケアが見れて本当に良かったです。 ・ナースの家族へのケア（コミュニケーション）も見られて良かった。 ・実際に病院に行くことで、どのように看護師がケアを行っているのかを見ることができたり、また、コミュニケーションのとり方や患者への接し方など、教科書には載っていないことを実際に見たり、聞いたりすることができた。
実習に役立つ演習 （10件）	・9月の実習の前に見学にいけて、本当に良かったです。 ・すごい良い経験になった。 ・すごく参考になりました。 ・雰囲気もつかめたので、夏の実習には役立つと思う。 ・自分が看護援助技術を勉強して具体的な方法を学んだ後で臨床を見ることで、実際に自分が患者をどう援助するかをイメージすることができた。 ・実習の準備としても、将来のビジョンとしても、とても参考になりました。
看護師について （9件）	・時間に追われながらも、それを患者さんの前では全く感じさせないプロの顔を見せてくれました。 ・カッコいいナースが見れて、嬉しかった ・ナースの行動で正直、いいなあと、よくないな、慣れてってコワイと思った部分があったので、我が身を引くしめようと思います。
2日連続演習の意義 （7件）	・2日間設けられていることで、1日目にわからなかったことや見れなかったことを、2日目の目標にすることができたので、よかったですと思います。 ・2日間行ったのは、病棟の動きや患者さんの容態などが把握できて良いと思う。
より多くの体験の希望 （6件）	・自分が当初考えていたよりも習った技術（Vitalなど）が全くやる機会がなかったのが残念だ。 ・ナースの方にもう少しきちんと「シャドーイングアドバンス」とは学生に何をやらせるかってことを先生から伝えてほしいなあと思いました。
その他 （15件）	・今までの勉強が実際に行われていることに喜びを感じた。 ・ふだんの授業では学べないことがたくさんありました。 ・体力的にはすごく疲れた。 ・1年生の時はナースがやっていることの根拠などは全く考えていなかったけど、ケアをする際にきちんと根拠に基づいていることがわかりました。

ント・看護技術以外の経験として、「家族へのケア」「終末期のケア」などが記述され、ケア場面を認識する視点が養われていることがうかがわれる。「家族関係論」など「看護援助論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」のみならず、彼らの既習の知識のすべてをシャドーイングアドバンスにおいて、臨床現象と結び付けていると推察される。このように、学生は、「看護援助論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を含む既習の講義と実

践のつながりを実感し、今後の課題を明確化にしていた。

また、看護技術の経験以外に、看護師と行動をとることで、「看護師役割の把握」をし、自らの「ロールモデル」を獲得していた。これらの経験は、「看護援助論Ⅳ」の2つめの目的である「看護に対する自らの考えを明らかにし、看護専門職者としての態度を養う」ことに資するものであると思われる。

表4 シャドーイングアドバンスが実習(「看護援助論Ⅳ」)実施に役に立った点

- ・演習での看護技術と臨床での技術のやり方の違いがわかった。
- ・日常生活の援助が具体的にわかった。患者さんとのコミュニケーションのとり方など、参考になった。シャドーイングアドバンスがないと、実習でもっと何をやっていいかわからない。
- ・行っていなければ、病院がどういうところかわからなかった。もしもシャドーイングアドバンスをやっていなかったら病院に慣れることができないままのスタートになる。
- ・環境に慣れるという意味が大きかった。体温計など病室での物品の位置や病棟の構造がわかった。
- ・学校で勉強したことと、(病院で)実際にやっていることが結びつく場だ。授業中だとイメージだけで、実際見るできるので、その意義が大きい。
- ・技術で学んでいるときは、これをいったいどういう場面で使うのだろうと思っていた。病棟に行ったら、実際に朝バイタルサインをとっていることなど流れがよくわかった。
- ・実際に技術を行うと、何のためにウォッシュクロスが必要で、何のためにタオルが必要なのかよくわかった。演習でも実際にやっているが、現場に行くと患者さんが目の前にいるから、必要性が理解できる。
- ・学校で習ったことと実際に現場で行われているとのつながりを実習前に確認できたことは、ものすごくよかった。病棟の物品配置や物品の具体的な利用方法が同時に理解できた。

なかでも、特筆すべきは、「自らの成長の自覚」がされ、「モチベーションの向上」がなされたことである。シャドーイングアドバンス実施1年前の1年生の7月にエプロンをつけて病棟で行ったシャドーイングベーシック時との違いを、多くの学生が記述しており、「自らの成長の自覚」が大きな喜びにつながっていることがうかがえる。学生が初めての実習に円滑に導入することができるように、「学生が病棟という場に慣れる」ことをその最たる目的として、2年次の実習直前にシャドーイングアドバンスを導入したが、場に馴染むという目的以外に、期せずして学生は強く「自らの成長を実感」し「モチベーションを向上」させていた。これは、広く看護教育の場で取り入れられている^{3) 4) 5) 6)}早期体験学習 (EARLY EXPOSURE) の目的である「動機づけ」に通じるものであり、本学の早期体験学習 (EARLY EXPOSURE) としての2つのシャドーイング演習は、段階的に行われることで、学生に自らの成長を喜びと共に実感し学習意欲を向上させていた。看護師の実践の見学をとおし看護現象を客観的に捉えることができ、部分的に看護実践を担うことで自らの成長を自覚できるシャドーイングアドバンスは、自らが実際に看護を展開することが課せられる実習とは違った学びをもたらしたといえよう。

シャドーイングアドバンスの方法については、時期、期間ともに、肯定的な感想が述べられていた。だが、一方で、シャドーイングアドバンスでは、その経験内容が臨床状況に大きく影響されるため、学生によって学びの内容に幅があることは否めない。今後は、より効果的に演習が遂行されるよう、臨床側との調整をふくめ演習方法を検討する必要がある。

また、今回のシャドーイングアドバンスでは、フィジカルアセスメント技術に関しては、バイタルサインの測定を90%の学生が経験していたが、それ以外では、腹部・胸部の聴診などの経験率が30~40%、その他は20%との経験率が低かった。このことは、臨床場面で実施されて

いるフィジカルアセスメントは、バイタルサインの測定と腹部・胸部の聴診が大部分を占めているという他の報告^{7) 8)}と一致しており、フィジカルアセスメント技術の習得においては、実習実施上の教育的配慮が必要であることが再確認された。

今後は、今回のシャドーイングアドバンスという試みから得られた成果も踏まえ、学为主体である学生を中心とした看護学の導入プログラムの構築に向け、調査研究を実施していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 小山真理子, 植村由美子, 藤原ゆかり他. (2004). 看護学生の大学入学時の学習への期待および看護・看護職についての認識, 神奈川県立保健福祉大学誌, 1(1), 85 - 94.
- 2) 菱沼典子他. (1996). 聖路加看護大学1995年度改訂カリキュラムについて, 聖路加看護大学紀要, 22, 113 - 121, 120.
- 3) 浅井直美他. (2007). 看護早期体験実習における学生の意味化した経験の構造, 北関東医学 THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL57巻1号, 17 - 27.
- 4) 皆川敦子他. (2006). 早期体験実習における看護学生の学び 早期体験実習後におけるレポートからの分析, 日本看護医療学会雑誌8巻2号, 33 - 43.
- 5) 田中美穂他. (2006). Early Exposure としての基礎看護学実習Ⅰの検討 学生の自己評価結果から, 東邦大学医学部看護学科紀要19号, 37 - 49.
- 6) 菊池和子. (2002). 訪問看護からみた看護技術教育の検討 - フィジカルアセスメントの技術を中心として -, 岩手県立看護学部紀要, 91 - 95.
- 7) 安達祐子. (2003). 臨地実習におけるフィジカルアセスメントの実施状況, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要第16号, 79 - 86.